人文フォーラム

36

2012.3

CONTENTS

巻頭言
二十歳の季節　人文学部長　安酸　敏眞……1
別れのあいさつ
Endings and Beginnings　Wilma Luth……2
Essay
時をこえて：進化に潜む形作りの遺伝子たち　竹内　潔……3
国際交流レポート
第10回カナダ・ブロック大学研修旅行報告　田中　洋也……4
カナダ・ブロック大学研修旅行体験記
大木七帆、川合優貴、後藤博子、村山琴美……6
平成23年度韓国大田大学校夏期研修
圓成千尋、茂木麻未……10
平成23年度韓国大田大学校留学生体験記
徐人、朴全愚……12
在外研修を終えて　テレングト・アイトル……14
ゼミ室紹介
1部　英米文化学科　3年　佐藤ゼミナール ……16
2011年度北海学園大学市民公開講座
世界の言語と文化のモザイクを眺める
寺田　吉孝……18
卒業生通信
日本国内で英語を活かす　平田　ゆき……19
大学院の窓
私の研究課題「先住民族文化と観光」について
ーアイヌ民族をめぐる最近のトピックー　藤川　清則……20
研究、その足跡 ……21
編集後記 ……25

北海学園大学人文学部

巻頭言

二十歳（はたち）の季節

人文学部長　**安酸　敏眞**

現代は長寿高齢化社会！　いまや人生 80 年、90 年どころか、100 の大台を超える人も珍しくない。ちなみに、わたしの母は 92 歳になり、自力で出来ることはごく限られているが、生命の炎はまだ燃え続けている。わたし自身も先ごろ還暦を迎えたが、正直なところ、自分が老いの域に差しかかっているという実感はあまりない。しかしわたしが研究対象としてきたフランクもレッシングもトレルチも、いまの自分の年歳にはすでに他界している。

実際、ひとはかつてもっと短命だった。織田信長は「人間五十年、下天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり。ひとたび生を得て滅せぬもののあるべきか」と謳い舞った後、桶狭間の戦いに勇ましく出陣したという。いまから約 450 年前のことである。彼はこのとき 25 歳、まさに人生の中間点に差しかかっていた。その 22 年後、彼は本能寺で自刃したので、「人間五十年」にはわずかに手が届かなかったが、ほぼそれを全うしたと言ってよかろう。

さて、ひたすら前方の目標に向かって走ってきた自分であるが、先般、思いがけない一本の電話によって、青春時代を懐古することになった。1980 年の夏、わたしは国際ロータリー財団奨学生として、米国ジョージア州 Statesboro にある Georgia Southern College で、2 カ月間の語学研修を受けた。そのときの仲間が集まって Facebook をやっているので、それに加わらないかとのお誘いだった。記憶の片隅に埋もれていた当時の思い出が走馬燈のように甦ってきた。Rotary friends 1980 と名づけられたこのグループは、現在では 17 名ほどに膨れ上がっている。タイのスシャダ、イタリアのスザンナ（ベルギー在住）、フィンランドのアナマイア、ブラジルのホサ＝マリア、アルゼンチンのマルタ、エジプトのザーラン、メキシコのエンリケ、オランダのヤン、インドネシアのディディク、ドイツのクリス（アメリカ在住）、そして 7 名ほどの日本人。31 年の歳月が経っているので、Facebook の写真はあの当時とはかなり変化してはいるが、間違いなくあの暑いジョージアの夏をともに過ごした懐かしい面々である。31 年の歳月を経て、友情のネットワークがこうしてふたたび世界中に広がった。

世界各地から集まった 20 代の若者が、学内の寄宿舎で寝食をともにしながら 2 カ月を過ごしたので、当然のことながら、連日のように各種のパーティが開催され、また淡い恋が芽生えたりもした。その中の一人の今野玲子さんが、弾き語りで歌ってくれたオリジナル曲「二十歳の季節」は、外国人ですら口ずさむほど愛唱された。「少女の頃は誰もがみんな／透明な愛の涙流したわ／初めての恋に　ウ〜／二十歳になったわたしの頬に／つたう滴そっと触れた指先に／心は揺れてる　ウ〜／めぐりめぐる季節の中で／あなたに出逢えた安らぎ……」。彼女から寄贈された貴重な録音テープを、二十数年ぶりに筐底から取り出して聴いてみた。時間の経過をすり抜けた美しい歌声に、過ぎ去った時間の非情な重さを痛感させられた。

われわれの「二十代の季節」は、ジョージアゆかりの名作「風とともに去りぬ」（Gone with the Wind）のごとく、永久に過ぎ去ってしまい、わたし自身もいまや「人間五十年」を通り越して、侘びしい黄昏時を迎えている。だがおそらくこれも悪くはなかろう。「ミネルヴァのふくろうは黄昏時にはじめてその飛翔を始める」というヘーゲルの言葉通り、「二十歳の季節」には欠落していた人生の知恵が、過誤や失敗を繰り返したことで、少しずつ身につきつつあるからだ。大学教師という職業を翻って考えてみると、われわれはつねに「二十歳の季節」とその前後を生きる若者たちと関わっている。二度とない青春のただ中を生きる彼らに、われわれは一体何を与えることができるのか。そう自問する今日この頃である。

Endings and Beginnings

Wilma Luth

This past January in the final class of Writing 4 I set "endings and beginnings" as the free writing topic. I was really impressed with how much the students wrote in the time limit. Their ability to write freely for ten minutes on a topic had improved a lot since April. But I think another reason they could write so much is that "endings and beginnings" is a topic that brings many ideas and associations to mind.

In Japan the beginning of a new year soon leads to the end of a school year. For students the end of a school year may lead to the end of club activities and part-time jobs. Of course, for my second year students in the Writing 4 class, the end of this school year will soon lead to the beginning of their third year in university and the new challenges of seminar classes and job-hunting. In my case, the end of this school year is quickly leading to the end of my 20-year career of English language teaching in Japan.

I'm very thankful that my teaching journey led me to these three years of teaching and working in the Department of Humanities and Culture at Hokkai Gakuen University. I've enjoyed working with my colleagues in this faculty and it's been a privilege to teach our students for three years. I especially like teaching the same students in different classes and skills over two or three years. It's wonderful to see how the students improve in their English ability from year to year as well as grow in confidence and maturity.

As I think about what I hope my students have learned from me a number of things come to mind. First is simply knowledge about the subjects that we studied together - about Canada and global current events, as well as the four skills of reading, writing, listening, and speaking. Also I hope that many of them improved in their use of the various strategies that we practiced in class so that those strategies shifted from something that must be consciously planned for and thought about to actual skills that can be used naturally without advance planning.

The ability to acquire the skills of English doesn't happen without conscious and applied effort and so I hope that my students have gained awareness in what it takes to improve their English ability - how much time and effort it takes, but also how enjoyable it can be when you can communicate successfully in a foreign language. Learning a language takes hard work, but the rewards are immeasurable.

Finally, I hope that in the new school year the students at Hokkai will continue to develop a positive attitude towards studying English and especially learn to see English as a tool for communication with people from all over the world (not just native English speakers). And I hope that they will see themselves as the successful language learners that they are.

As I leave Japan and our paths part, I would like to wish everyone in the Jimbun Gakubu - students, faculty and staff - continued opportunities for learning and growth. It is my hope for my students, colleagues, as well as myself, that our continuing journeys, with all of their endings and beginnings, will never lead us to the end of learning, because, as it says in one of my favorite quotes, "All of life is learning, therefore education can never end."

The final Intensive Reading class

時をこえて：
進化に潜む形作りの遺伝子たち

英米文化学科教授　**竹内　　潔**

千年のときをこえて、奈良の大仏殿に供えられているチョウは八本肢という発見が伝えられた。発見者は、スイス・バーゼル大学、生物学者ワルター・ゲーリングだった。20 世紀も終わろうとしていた頃だったこともあり、その発見の報告にはひどく驚いた。その後、自分の眼でも 8 本肢のチョウを確認した。何故、それまで、それほど明らかな違いに、誰も気づかなかったのだろう。どれほどの数の参拝者が、大仏殿を訪れていたのだろう。

ところで、人間は 60 兆個の細胞からなり、それぞれの細胞には、2 万数千個の同じ遺伝子が存在している。しかし、それぞれの細胞は少しづつことなり、別の機能を受け持っている。さらに近年、動物のゲノムが次々と明らかになり、遺伝子の機能が判明するにつれて、ヒトとその他の動物の遺伝子の意外な共通領域が明らかになってきた。その中で、ホメオボックスの発見をたどることは、ヒトや他の動物の形作りと、進化の歴史を知るためにも、加えて、奈良大仏殿の 8 本肢のチョウの発見と感動を確認する上でも興味深いものがある。

今から百年以上も前、1894 年にベイトンは個体変異に注目し、昆虫の触角が肢に変化した例や、イセエビの一種で眼が触角に変化した例をあげて、体の一部が類似の構造に転換する現象に「ホメオーシス」という新しい用語を提唱した。一般的に昆虫の体は、頭部・胸部・腹部と大きく三つの体節に分かれているが、各部はさらに細かい体節からなり、それぞれに一対の肢がついている。変異の研究を通して、体の方向性や、体作りの順序を決定するしくみが分かるに違いないとベイトンは予感していたのだ。

ベイトンがそう考えた後に、コロンビア大学のモーガンのハエ研究室の研究者ブリジェスが、胸部が重複したキイロショウジョウバエを飼育びん内に発見し、この特徴（双胸＝バイソラックス）が遺伝することを証明した（1915 年）。このようなホメオーシスを支配する遺伝子は、ホメオティック遺伝子と呼ばれたが、その正体が分かるのはもっと後のことである。

そして、1970 年代の後半に、二人のドイツ人研究者が、ハエの一本の染色体上に口･顔･頭・首・胸・腹（前部）・腹（後部）・尾の形成に影響するホメオテック遺伝子が順序よくならんでいることを発見した。さらに、1983 年にスイスのバーゼル大学のゲーリングが、あらゆるホメオテック遺伝子に共通の DNA の塩基配列を発見し、「ホメオボックス」と名付けた。そして「ホメオボックス」という 180 塩基の DNA 配列は、カエル、マウス、ハエなどの遺伝子でも、ヒトの遺伝子でも発見された。ショウジョウバエとマウスとヒトの遺伝子にこれほどの共通性があることは驚くべき事だった。一億年、あるいはもっと長期間にわたる進化において、今日われわれの知る様々な生物はすべて単一の発生制御システムによって作り出されたということである。ハエ、カタツムリ、ヒトデ、魚類、そしてわれわれ自身も。

＊竹内潔先生は平成 24 年度より、本学工学部生命工学科に所属が変わります。（編集子注）

国際交流レポート

第 10 回国際文化演習（カナダ・ブロック大学研修）報告

引率教員　田中　洋也

2011 年 9 月 4 日から 24 日までの 3 週間、第 10 回国際文化演習（カナダ・ブロック大学研修）が行われた。研修には、1 部 23 名、2 部 3 名の計 26 名が参加した。引率は、人文学部講師ウィルマ・ルース、田中洋也の 2 名である。

期間中、参加者はオンタリオ州セントキャサリンズ市にあるブロック大学 International Centre において語学、文化研修に従事した。本プログラムでは、参加者は北海学園大学特別グループとしての活動（文化体験、施設見学）を行ったほか、ブロック大学集中 ESL プログ

帰国日の International Centre 前で記念撮影

ラムのクラスに習熟度別に配置され、1日5時間の英語授業を受講した。同時に、全員が現地の一般家庭でホームステイにより滞在期間を過ごした。

学生のプログラム参加により、得られた成果は主として次の二点である。

1．英語学習における意欲、動機付け

3週間という限られた期間で飛躍的な英語力の向上こそは望めないが、学生はそれぞれ所属するクラスにおいて知識、技能の面で一定の成果を上げた。学生の変化が顕著であったのは、授業を通して教員、他国からの学生と英語を使用することで、自身の英語力についてより客観的にとらえられるようになり、今後の英語の学習について動機付けが高まったことである。意欲の面では、研修終了が近づくにつれて、日本の他大学からの参加者のように3カ月間（1学期）滞在し、ESLコース修了まで取り組みたいという学生の声が多く聞かれた。将来的に他大学で先行しているような単位認定制度が整えば、ブロック大学の受け入れ態勢、本学部の学生の英語力を考えると十分に可能な選択肢となる。さらに、一部の学生は、カナダでの学位取得や就職を目指す他国の学生にも刺激を受け、より長期的な留学に関心を持つようになった。2012年度カナダ、レスブリッジ大学派遣学生として内定した2名が今回の参加者から輩出された結果を見ても、本演習の意義を実感できる。

2．多文化的価値の理解

学生はホームステイ先や現地での生活を通して、多様な背景を持つカナダの文化に触れることができた。また、所属するクラスにおいても他国からの学生との交流の機会を得て、様々な地域、文化について考える機会を得た。こうした経験は、自国やその文化についても振り返る機会となり、それぞれが新たな視点を得たものと考えられる。

引率教員2名は、プログラム期間中に現地職員、教員と話し合いや会食の機会を幾度か得た。その中で、今後のプログラムの継続と発展に関しても意見を交換した。現在、ブロック大学ESL部門では、通常の集中英語プログラムと北海学園大学グループのような特別プログラムを並行して行っている。その一方で、学部入学生、ESL受け入れ学生の増加が続き、大学の規模も急速に拡大しているため、特別プログラムの継続には、今後も継続的な情報、意見の交換が必要であることを認識した。また、学生のニーズを踏まえた3カ月プログラムについても積極的に受け入れたいという先方の意志を確認した。

短期間ではあるが、海外渡航そのものが初めてという学生も多く参加した研修を、大きな事故なく、順調に終えられたのは、これまで10年以上に及ぶ、北海学園大学人文学部、ブロック大学の双方の関係者の尽力があったからにほかならない。今後のプログラムの発展的な継続を願うとともに、お力添えをいただいた関係の皆様に感謝したい。

修了式　ウィルマ先生の挨拶

ブロック大学語学研修を終えて

1部　英米文化学科　2年　**大木　七帆**

昨年９月、私はカナダのオンタリオ州にあるブロック大学の語学研修に参加させていただきました。北海学園からは 26 名の学生が参加し、顔見知りも多く、寂しさを感じたりホームシックになることもありませんでした。しかし、何より現地の方々が温かく、そして優しく迎え入れてくれた事が大きかったと思います。学校では現地の先生方、様々な国籍のクラスメイトが、家に帰るとホストファミリーやホストブラザーが、更に近所の人までもが、私を受け入れてくれました。上手く英語の喋れない私を、快く受け入れてくれた事にとても感激したのを覚えています。たったの３週間でしたが、たくさんの友人ができました。彼らとは今でも連絡を取り合っています。国や言語が違っても人に優しくできるのだと、改めて感じた瞬間でした。

ブロック大学のあるセントキャサリンズはとても小さく、のどかですぐそばに山や川があり、自然に溢れていました。北海道よりも更にスケールの大きくなった自然というような印象を受けました。交通機関はバスしかなく、時間がゆっくりと流れていました。しかし、大学自体は非常に広く、ジムやプールがあったり、カナダではポピュラーなコーヒーショップも施設内にありました。北海学園では考えられない事なのでとても驚きました。また食文化の違いも強く感じました。まずサイズが違う。日本のＭサイズは向こうのＳサイズです。加えてお菓子などの色がカラフル。スーパーで買い物をすると色々な発見があって楽しかったです。

休みの日に観光地を巡ったり、様々なイベント、アクティビティに参加し、楽しい思い出がたくさんできましたが、悔しいと感じた場面も多々ありました。自分の英語力のなさゆえに、何と表現したらよいかわからず、上手く伝わらない、また相手の言っている事が理解できない事がしょっちゅうありました。留学を経験する前は、留学すれば何とかなる。自然に英語力が身に着くと考えていました。しかし、現実は違いました。文法や単語、用法の知識など自ら勉強することの大切さを強く感じました。幸いなことに、今年の春からレスブリッジ大学への約８カ月間の交換留学に参加させていただくことが決定したので、この悔しさをばねに更に自分を高めることができたらと思っています。英語を使いこなせるようになることはもちろん、それを今後にどう生かすのか、しっかり考えたいと思います。このように、英語と真剣に向き合おうと考えるようになったのも、ブロック大学での３週間があったからです。次の留学でどんな出会いが待っているのか。とても楽しみです。

Dalhousie のビーチで（最前列中央）

一生の思い出となった三週間

1部　英米文化学科　2年　川合　優貴

大学で英語を勉強し始めてから、約1年半が経ち、自分の中で「海外に行きたい」という思いがありました。そんな時にこの国際文化演習の話を聞き、参加しようと決意しました。さらに大学の夏休みは、約2カ月の期間があり、何か自分の役に立つような経験をしようと考えていました。ですが、いざ海外に行くとなると、なかなか参加を決意することができず悩んでいました。しかし、このような機会がこの先何度もあるとは限らないと思い、参加できるときにしておこうと考え、決意することができました。今思うと、本当に参加することができてよかったと感じています。3週間という短い期間でしたが、とても貴重で思い出に残る経験となりました。

カナダにいる3週間は、ホームステイをして現地の方とともに生活を送りました。ホームステイ先では、私の他に中国人の学生もいて、たくさん話しかけてくれて、毎朝一緒に学校に通ったり、困ったときには助けてくれたりと、とても親切にしてくれました。カナダに着いてから、1週間くらいは時差ボケや日本と食べる物も違うために、多少の苦労はありましたが、それに慣れてからは問題なく生活できました。カナダに行く前は、ホームシックになったりしないかなど不安はありましたが、ホストファミリーの優しい気遣いのおかげでとても楽しく生活できたと思っています。

ブロック大学では、初日にテストを受けてそれぞれのレベル別にクラス分けがされます。

授業は、ネイティブの講師によるものでクラスも少人数なので、細かく丁寧に授業をしてくれました。私の同じクラスには中国人やサウジアラビア人の学生がいて、もちろん会話などはすべて英語ですが、自分の国の言葉や文化を互いに教えあったりと、すべてが新鮮でたくさんの刺激を受け、とても有意義な時間を過ごすことができたと感じています。また、授業だけではなく、たくさんのアクティビティーが用意されており、ナイアガラの滝やカナダの遊園地ワンダーランド、トロントへの観光、アイスホッケーの試合観戦などどれも楽しく、思い出に残るものとなりました。

研修に参加した多くの学生は、研修の終わりに近づくにつれて「帰りたくない」という気持ちでいっぱいでした。私自身、カナダの生活に慣れてからは3週間がとても短いものだと改めて感じました。この研修を通して、異文化での生活や英語でのコミュニケーションの難しさと面白さを経験することができ、もっと自分の英語力を上達させたいという気持ちになりました。そして、また機会があれば海外に行きたいという思いが強くなりました。これからも、この経験を英語の学習や大学生活に生かして頑張っていきたいと思います。

International Centre にて

Lakeside Park で仲間と

カナダの研修旅行に参加して

２部　英米文化学科　２年　**後藤　博子**

セントキャサリンズの空は高く、その青く澄み渡った中に飛行機雲がくっきりと見ることができた。そんな中を、３週間早朝から毎日通学したのです。

2011 年度、新学期が始まるとまもなくカナダブロック大学への研修旅行の募集があり、迷うことなく参加を希望したのです。実際には行けるかどうかはわからないものの、挑戦はしてみたいと思ったのです。実は私は社会人入学の、しかもかなりの高齢者なので、本当に心配でした。ガイダンスを何回か受け、その都度期待と不安が増して参りました。期待は、“未知への出逢い、カナダという国や人々をもっと知りたい”、不安は、“毎日の学校の授業についていけるのか、ホームステイファミリーの方々とうまくコミュニケーションがとれるのか”、そんな諸々の思いを抱きながら、私の夢は実現したのです。

長いフライトを終え、学校に到着したのは夕方になっていました。ブロック大学センター前には、すでにホームステイの家族の方々が大勢待っていてくださいました。「どの方が私の家族になる人なのだろう？」、それは、待っていてくださったカナダの方々も同じ思いだったのではないかと思います。

私の場合は、ホストファミリーのお父さんテリーと、一日前に関西大学からその家に滞在のともみさん、そして、ペットのドッグスター（犬）が迎えに来てくれました。会うなりお父さんが、「ヒロの○○歳の誕生日のお祝いはうちでするから」と言ってくださったのです。びっくりするやら、恥ずかしいやらで、赤面してしまいました。普段は英語の聞き取りの悪い私が、なぜかはっきりと聞き取れたのです。

こうしてカナダの生活が始まりました。テリーの家はとても大きく、立派な家で、プールもあり、プールサイドにはバーベキューセットやテーブルも備えられていました。玄関前も木々におおわれ、その中をよくリスたちが遊びに来ていました。朝はテリーが朝食やランチの用意をしてくれました。お母さんウェンディーもいるのですが、彼女はプロのシェフで毎晩おそくまでダウンタウンのレストランで働いているのです。ですから、朝はウェンディーと顔を合わすことは殆ど無く、学校から帰宅したときに会うくらいです。

学校の勉強もけっこう時間に追われて大変でしたが、いろいろな国から学生が来ていました。とにかくどの教室も中国人が多いのです。次にサウジアラビア人、つづいて日本人でした。また時々午後には観光に連れて行っていただき、ナイアガラの滝へは２度、１度は乗船し、滝のしぶきを体感し、ワイナリーへも行きました。トロントへも１日観光があり、有意義な時間を持つことができました。

研修期間も後半に入り、やがて私の誕生日がやってきたのです。学校行事としての Farewell Party の際、突然女性オーナーが私のためのバースディケーキを持ち、“Happy birthday ！！”と言いながら近づいて来ました。私は本当に驚きました。まさかその時にしてくださるとは思っていなかったのです。ほんの一瞬たくさんのフラッシュを浴び、大スターになったのです。そして翌日、ファミリーでもお祝いをしてくれたのです。普段通り学校から家に帰ると、ウェンディーが“ヒロ！　バルーンをみた？”と言われ、よく見ると“Happy Birthday”と書かれたバルーンが玄関先に上がっているではありませんか。その夜、家族中、テリーのお母さんも来てくれ、もう一人中国人のお友達ナンシー、その友人、そしてブロック大学からもカレンさんがお祝いに駆けつけてくれました。

というわけで、あっという間のカナダ研修が終了しました。今思い返してみますと、道に迷ったり、失敗もいろいろありましたが、この年令になって異国での勉強も生活もじかに体験できて、本当に良かったと思うのです。まして、若い学生さんたちには絶対に経験してほしいと思います。

誕生パーティーにて

海外研修を終えて

１部　英米文化学科　３年　**村山　琴美**

カナダで過ごした３週間は毎日とても充実していて、あっという間でした。私は海外に興味があり、カナダも行ってみたかった国なのですごく楽しみでしたが、行く前は正直不安のほうが大きかった気がします。ですがカナダに着いたら、優しいホストマザーと可愛い愛犬のミラが温かく出迎えてくれました。家には中国人の留学生と、私のほかにも日本の留学生がいて、毎日とてもにぎやかでした。

IELPの授業ではテストでクラス分けがあり、私のクラスには日本のほかに、中国、サウジアラビア、韓国の留学生がいました。授業では、初日から他の国の学生がたくさん発言をし、どんどん英語を話している様子を見てとても驚き圧倒されました。私はクラスメイトと話すことも緊張してしまい、発言の少なさに最初は落ち込みました。せっかく参加した海外研修をこのままの状態ではいけないと考え、翌日から少しずつクラスメイトに声をかけたり、相手の国の挨拶を教えてもらったりして、自ら話すように心がけました。自然とクラスメイトと仲良くなり、休み時間に一緒にお菓子を食べたり、お互いの国について学んだり、英語を使って会話をすることで、とても楽しい時間を過ごすことができました。

学校での授業のほかに、毎日たくさんのアクティビティーがありました。ナイアガラの滝を見に行ったり、アイスホッケーの試合を観戦したり、バーベキューやハイキングなど、カナダの文化や大きな自然に触れることもできました。

言語や習慣などの違う国で生活をするということは、わからないことや戸惑うことばかりで本当に大変でしたが貴重な経験でした。バスの乗り方を人に尋ねたり、洗濯の仕方をホストマザーに教えてもらったりなど、ちょっとしたことですが毎日ひとつひとつできるようになっていくのがとても嬉しかったです。

３週間のカナダの生活で、より一層英語を身近に感じ話すということに慣れたことで、自分の意見を英語で伝えることができ、たくさんの人とコミュニケーションが取れるようになったと思います。

短い期間でしたが、多くの出会いがあり、かけがえのない時間を過ごすことができました。優しくて元気なホストマザー、カナダで知り合えた友達とは、今でもメールなどで情報交換をしています。この出会いをこれからも大切にしていきたいと思います。そして、お世話になったブロック大学、引率の先生、一緒に参加した仲間、研修の参加に後押ししてくれた家族、支えてくれたたくさんの方に感謝したいです。私はこの経験を今後の生活に生かしていきたいと思います。

IELP の参加者と一緒に（最前列の左端）

一期一会

1 部　日本文化学科　3 年　**圓成　千尋**

私は 8 月 7 日から 28 日までのおよそ 3 週間、学校の韓国研修に参加しました。一応韓国語演習を履修していたので自分の語学力を試したかったという理由もありましたが、学生のうちにしかできないことをやってしまおうという理由の方が大きかったかもしれません。団体で 3 週間も韓国に行き、更には観光目的では絶対に行かないような土地に行くという体験は本当に新鮮でした。ましてや私は人生で初めての海外であったために見るもの全てが新鮮でした。

3 週間全てを書いてしまうと膨大な量になってしまうのでいくつか抜粋して書いていきたいと思います。我々研修団が韓国に行ってからおよそ半年が経とうとしていますが、今振り返って思い出すと、話そうという気持ちさえあれば会話能力は自然と上達するものだということを感じています。元々たった 3 週間の研修では会話能力は向上しないと先生方にも言われていましたし、確かに自分でも思っていました。しかし恥ずかしがらずに極力韓国語で話せばふとした瞬間に意識しなくても韓国語が出るようになっていました。他の人たちも韓国語の能力に関係なく、相手がおおよそ何を言っているのかの予想は少しできるようになっていました。行きの飛行機の中では CA の方々に韓国語でありがとうと伝えるのも恥ずかしくて会釈しかできなかったのに、韓国に到着して数日が経ったらみんなコンビニでも食べ物屋さんでも気軽に自然と韓国語でありがとうと伝えていました。もちろん、このことは韓国で毎日のように行った授業も大きく関係していると思います。韓国では朝の 2 時間ほどを韓国語の授業に当てていました。韓国の大学で授業を受けるなんて、もちろんただの観光では絶対にできない経験です。授業も楽しくて、その日習った表現はその日のうちに実際に使えたりしたのでみんなの上達も早かったのだと思います。私たちを 3 週間お世話してくれた大田大学の学生たちの存在も今回の研修を語る上では欠かせないです。本当にお世話になったし、素晴らしい思い出をたくさん作ってくれました。今度は彼らが北海学

園に来ます。彼らが私たちにしてくれたように、たくさんの思い出を作ってあげたいし、もっと日本を好きになってほしいと思っています。

私は研修を通して一期一会という言葉を身に感じました。韓国で出会った人たちの中には一期一会の縁だろうという人たちもたくさんいました。ホームステイ先の両親、毎朝顔を合わせていた食堂のおばちゃん、コンビニの店員さん、日本語で話しかけてきてくれた服屋の店員さん。みんな、もう今後出会うことはないであろう私たちにたくさんの思い出をくれました。研修が楽しかったと言えるのもこの方々のお陰でもあります。この経験は私の人生の糧にもなりそうです。「どうせ一期一会の縁だから」ではなくて「せっかく一期一会の縁なのだから」という気持ちの方が断然大きくなりました。

たった 3 週間ですが、人生において大切な 3 週間であったと思います。正直な話、大学 3 年生ということでインターンシップなどと重なっていた時期でもありますし、研修に参加しようか悩んだこともありましたが、今なら研修に参加して良かったと胸を張って言いきれます。充実と成長を感じた素敵な 3 週間でした。

初めての海外研修

１部　英米文化学科　４年　**茂木　麻未**

この研修に参加するまで悩むことがたくさんありました。特に自分の語学力に関しては大きな不安がありました。それまで私は４カ月ほどしか韓国語を学んでいなかったため挨拶や基本的な会話しかできず、こんな状態では正直やっていけないだろうと思っていたのです。しかし４年生の私にとってはこれが最後のチャンスだと思い、参加することを決めました。実際に研修に参加した生徒も様々で、韓国語の授業を履修せずに独学のみで参加した人もいました。行きの飛行機やバスで一緒に韓国語を復習したり好きな芸能人について話したりしながら、自然と仲良くなっていったのを覚えています。

現地では平日の午前中に大学校で語学の授業を受けました。ネイティブの先生ですが日本語を話せるため、１つ１つ丁寧でわかりやすく教えていただきました。午後は大田大学校のボランティアの生徒に街を案内してもらい、韓国のお料理をいただいたり博物館に行ったり、テコンドーや韓国式の岩盤浴の体験もしました。週末には少し遠出をして全州で文化体験をし、ソウルや釜山の観光、そして１泊２日のホームステイをしました。私は授業の先生の御宅にお世話になりましたが、やはり語学力の足りなさを痛感しました。特にご家族の方が話す韓国語は速く感じてしまってなかなか聞き取れず、またこちらから話しかける時にも単語が出てこなくて何度も先生を頼ってしまい、その度に悔しい思いをしました。

研修中に一番印象に残ったことはやはり毎日の授業と宿舎での生活でした。当然ですが、宿舎では掃除や洗濯、スケジュールや体調管理など全てが自己責任です。しかしその中で他の生徒と助け合い、空き時間には現地の学生とも交流できたことが何よりも素敵な思い出となりました。また、帰国して日本の韓国語の授業を受けた時の自分自身の変化には驚きました。以前と比べて韓国語を聞いて理解する力が格段と上がり、また読むスピードも速くなっていたのです。これも研修中に毎日先生や他の学生と密なコミュニケーションを取っていたおかげだと思います。

異文化に触れて得られるものや考えることはたくさんあり、確実にいい刺激となるはずです。このような貴重な経験は、やはりなるべく早い時期にしておくのをお勧めします。重要なのは行動に移してみることだと思うので、少しでも留学に興味があるのならぜひ体験してみてはいかがでしょうか。

平成 23 年度韓国大田大学校留学生体験記

楽しかった日本留学体験

徐人（ソイン）

初めて海外に向かう飛行機に乗ったのが昨日のようですが、もう数カ月が過ぎ、日本で何ヵ月間も住んでいるのだと思うと不思議な気がします。小学校から日本のアニメが好きで、それによって日本語が好きになり、憧れを持っていた日本に今こうして私がいることを思うとちょっと信じられない気がするのです。

日本に来てまず大変だと思ったのはやはり言葉でした。自分は韓国で頑張って日本語の勉強をしたと思ったのに、言葉も思ったほど伝わらないし、漢字もまったく分からないのに手続きに必要な文章は漢字だらけだし、漢字が多くて書きたくない住所を、何回も書かせられたことにいらいらしたときもありました。初めはそんな感じで日本に慣れるのに精一杯でしたが、少しずつ慣れ始めて、日本が見えるようになったころにはいろいろなことに興味がわきました。一番感心したのは他人への配慮、と言ったらよいでしょうか……たとえば、道路にある障害を持っている人のための黄色い線。韓国にももちろんありますが、全く役に立たないものだと言われています。なぜかというと、あるにはあるのですが､形だけのものなのです。というのは、実際に韓国でこの黄色い線を使って歩くと、壁にぶつかったり、横断歩道ではないところを歩くようになったりして、危ない感じなのです。日本ではどこを見てもきちんと整っていて、正直、びっくりしました。それ以外にも、列をきちんと守るようにしているところとか、ゴミのない綺麗な道など、韓国も見習って欲しいと思っているところは多かったです。

しかし、日本だから不便になったところもありました。韓国だったらすぐ終わるはずの手続きが、日本では複雑で、遅いと思ったときがありました。外国人登録証を作るのにもいろいろ書かなければならないものがたくさんあったし、発行されるのにも思った以上に時間がかかったり、EMS を送るのにも、いろいろ細かく書かなければならないところがたくさんあって、いらいらしたときもありました。

韓国と違って驚いたところもありました。友達のサークルの劇を見に行ったとき、客として友達と接してみたら、普通とは全く違う丁寧な反応をされて驚きました。これは日本では普通であるということを聞いて、少し、変な感じがしました。韓国では友達であれば場面に関係なく友達に対して同じような反応をするので、そう感じたのかもしれません。これが文化の違いだということでしょう。

初めて外国人の立場になって、不便に感じたり、戸惑ったりした部分はたくさんありましたが、他の外国人と日本語で言葉が通じてうれしかったです。初めて友達ができて、いろいろなところにいっしょに遊びに行った経験は今でも忘れられない、大切な思い出です。韓国に戻ってもこの思い出はきっと忘れられないでしょう。国へ帰った後も機会があったら、ぜひ、また日本に遊びに来てみたいです。有難うございました！

授業のあとの「焼き鳥屋」で（ロシアからの留学生､クラスメートと）

留学体験記

朴全愚（パク・ゼウ）

僕は日本で日本文化を体験し、新しく人生の経験をするために、韓国では学ばなかった日本語を勉強するために日本にきた。何もわからないまま、ぶつけて見ようと思って日本に留学す

ることになったが、そのときは努力も何もしなかった。他の留学生とは違って、悩みもなく、ただ日本での生活が楽しみなだけあった。僕はそれを日本に来てから気づいて、日本語ができない、もっと勉強しておけばよかったと思った。日本人の友だちとの会話、学校の授業などで感じた言葉の伝え方が上手にできなかったことで、韓国と日本の文化の差より言語の障壁を乗り越えることが先であることに気づいた。でも、初めて日本に来たとき、僕の力になってくれた先生たちと他の留学生たちのおかげで、すぐ日本の生活、文化に適応することになった。

留学する前に、自分を変えてみせるというモットーで日本での生活を始めたが、今になって思えばあまり変わったことはない。でも、韓国で過ごした退屈な大学時代から抜け出るために選んだ道として、他の人よりももっと努力しようとした。自分自身が日本語に弱さを感じていたせいか、学校で授業をまじめに聞き始め、講義の内容だけではなく、先生の日本語の表現を一つ一つ聞こうとした。特に韓国にはないゼミのような授業は最初は難しかったが、自分の考えをまとめて発表したり、相手の意見と合わせたりしたことで、日本語だけではなく、考え方、自分の考えをはっきり言える能力まで上がったと思う。

日本の生活に難なく適応できたのも、やはり食生活に問題がなかったのがもっとも大きな理由だと思う。和食が現在韓国でも流行していて、すでに食べ慣れていたのである。

韓日間、文化的、社会的な雰囲気の差から来る問題はなかったが、たまにそのせいでホームシークになってしまったときもあった。でも、今は日本文化の中から抜け出て韓国に帰っても、日本への生活を懐かしく思うかもしれない。

僕は日本に来て、初めて学校のサークル活動もした。ダンスが好きでダンスのサークルに入ったが、踊るのが初めてで、どうしたらいいのかも分からなかった。さいわい、サークルの人がよく指導してくれて、ダンスの大会に参加した。そのとき恥ずかしくて思うままに踊れなかったのがまだ記憶の中に残っていて、絶対に忘れられない思い出の中の一部になった。

また、今まで韓国でも経験できなかった友達との旅行もある。最初は青森にねぶた祭りを見に行ったが、あまりにも過酷な暑さで、帰りの夜行列車の中で倒れてしまった。そのほか、僕を含めて韓国人二人と日本人一人、中国人一人とで行った本州への８泊の旅行で、僕は日本の文化を体で感じることができた。また、日本で新年を迎えた記念として行った北海道の最北端、稚内の旅行で僕は生まれて初めて皮膚が痛くなって苦しいほどの寒さを感じたが、それが本当に楽しくて、今までの旅行の中で最高の旅行といっても過言ではない。

僕は日本の留学生活を旅行だと思う。周りのスーパーに行くこと、テレビを見ること等すべてが僕にとって知らない世界への一歩であった。生まれて今まで使っていた韓国語を離れて、僕は言葉の大切さを感じた。言葉が分からないと会話も上手にできないのである。韓国でもっと勉強して来ればよかったと今までも後悔している。勉強するより他の楽しさを感じるのに重点を置いて勉強はあまりしていなかった。学業的には完璧ではなかった留学生活であったが、そこで僕は様々な教訓を得た。こんなによい機会がまたあるかは分からないが、もし、また日本で経験した留学生活のように日本で生活する機会があったら、是非また日本に来て住みたいと思う。

青森ねぶた祭りで（中央がわたしです）

[在外研修を終えて]

ケンブリッジ大学のパルテノン神殿

日本文化学科教授　テレングト・アイトル

アクロポリスに建設されたパルテノン神殿（B.C.438）は、アテナイの守護神である女神アテーナーを祀るためだったが、西欧にとって深遠かつ広汎な宗教的、芸術的、政治的な主題にかかわる磁場か、あるいは、中心の一つとなっている。ローマ帝国は、その伝統を継承して、ローマの神々を奉るパンテオン（B.C.25）を建設した。フランスはそのしきたりに従い、パリの守護聖人に献堂するため、新たなパンテオン（1792）を建造したが、フランス革命期の国民議会による決定がきっかけで、フランスの偉人たちを祀る霊廟となった。さらにドイツはヴァルハラ神殿（1842）を建造して「賞賛に値する著名なドイツ人」の殿堂として、政治家、科学者、芸術家などを祭っている。イギリスのエルギン卿トーマス・ブルースは、まんまとパルテノン神殿のメトーブやフリーズをギリシャから持ち帰って（1807-1811）自分のサロンに展示し、のち英国政府に買収され、現在、大英博物館（大英博物館の破風もパルテノン神殿の模倣）で展示されている。アメリカのテネシー州も万博開催のため中心的建築物として原寸大レプリカのパルテノン神殿（1897）を建造したのである。

これらの神殿の目的は原型となるアクロポリスのパルテノン神殿とは少しずつ違ったものの、いずれもその一部分を踏襲し、ギリシャの磁場か中心への回帰的な祭祀行為だと考えらえよう。とりわけ歴史的な認識として国家･政治･権力と最も親近な建造物とされ、実際、国家・政治・権力のシンボルとして解釈されてきた比重が大きい。

①アテネ、アクロポリスのパルテノン神殿

②ローマ、パンテオン神殿

③ドイツ・レーゲンスブルク、ヴァルハラ神殿

④ロンドン大英博物館、パルテノン神殿破風の彫刻

一方、13 世紀に創立して発展してきたケンブリッジ大学は、ルネサンス以降、世界の知の中心として変貌しつつも、大学それ自体の中心は定かではなかった。現在でも、大学都市としての中心はどこかというと、しばしば規模、財力、知名度、礼拝堂と地理的配置から考え、キング

ス・カレッジか、トリニティ・カレッジを指す。しかし、学芸を司る古代ギリシャの神々を知っている人なら、フィッツウィリアム博物館（1848）こそケンブリッジ大学の真の中心だということがわかる（ケンブリッジ大学の南側に建造されたにもかかわらず）。というのは、パルテノン神殿の正面破風をモデルにして、アポロと女神たちが彫刻され、さらにパルテノンの東西南北のメトープを縮小した形で、長方形正面のメインホールの内側に再現されているからだ(それは一見、大英博物館の小型だとも言ってもいいが)。そしてフランシス・ベーコン、ニュートン、ダーウィン、ケインズ、ヴィトゲンシュタイン等、近代以降の人類史において、新しい知のシステムと社会の変革に大きく貢献した数々の著名人を輩出してきたことを考え合わせると、アポロと女神たちを据えたフィッツウィリアム博物館は、名実ともケンブリッジのパルテノン神殿として、世界の知の中心として誇示しているようにとも看取される（2011年までノーベル賞受賞者 88 名、世界最多）。

事実、ケンブリッジ大学は、西欧の歴史と歩調を同じくして、ルネサンス以降、古代ギリシャ・ローマの神々への憧憬が、ユダヤ教とキリスト教への信仰と批判とに、常に齟齬してきただけではなく、古代ギリシャの神々と科学精神とも交叉しながら、「志向性」において一種のポリフォニーを成しており、それは決して単純にキリスト教と科学と契約精神を基礎にして解釈されるものではない。言ってみれば、一種の競合しながら融合し、否定しながら調和する複合体であろうか。少なくともその創立から、神学・哲学を上位に「自由七科」（文法・修辞学・弁証法〈論理学〉、算術・幾何・天文・音楽）を設け、イマージネイションを賛美して、その教育と訓練を施した結果、形而下の事実や実証的な手順だけではなく、形而上的なイマージネイション・ミメーシス・アンビギュイティ、あるいは隠喩・換喩などの諸思考・発想によって、それらの齟齬と交叉、対立と調和が自然に、かつまた激烈に対峙しながら（宗教と進化論の対立に見られるように）見事に合一され、その複合によって共存してきたのがその伝統であり、自明な知恵でもある。

したがって、パルテノン神殿とフィッツウィリアム博物館との関係は、単なる職人の模倣、伝統の受容・影響または追随の関係ではなく、むしろ、以上の思考と起源への想起・イマージネイションによって、フィッツウィリアム博物館はパルテノン神殿としてケンブリッジ大学をアクロポリスにし、知の独立王国を宣言し得たのだと言える。それは国家・政治・権力とは一線を画し、知の自立を意味しており、独立国家と同じように、独自の知の世界を形成したのを主張しているのであろう。したがって、もしその思考と見識を無視して、だれかがフィッツウィリアム博物館をもってパルテノン神殿と実証的な比較をしようとすれば、それは言わずもがなの現代人の一種の幼稚の表れにしかない。

このようにケンブリッジ大学は、フィッツウィリアム博物館をパルテノン神殿として、個性豊かな 31 のカレッジが互いに競争しながら一個のアクロポリスの知の王国をなし、その豊饒さによって人文の複雑さを捏ね回して楽しみ、複雑だとわかればわかるほど結構なのだ(決して細かさに固執しない)。良いことに悪い面を、悪いことに良い面をさがし、悪魔にもいい点をつけようと、結局のところ、それは世俗と権力とは見えないところで一線を画し、リベラルな知それ自体への信仰を深める場所で、かつそれによってインスパイアされる場所だと言える。

⑤ロンドン、大英博物館正門

⑥アメリカ、テネシー州パルテノン神殿

⑦ケンブリッジ大学、フィッツウィリアム博物館

ゼミ室紹介

1部　英米文化学科　3年
佐藤ゼミ

ゼミ指導教員から

3・11の震災以後、「死者」の弔い方や「なぜわたしがこんな目に」という世界の不条理さがさまざまな仕方で語られてきました。〈合理的（と思われている）社会〉のなかには〈非合理的なもの〉が存在するという、実は当たり前の事実があらためて実感されたのではないでしょうか。またそのどうしようもない破局的な出来事にさらされた人々が〈宗教的なもの〉を求めたのもよく理解できます。なぜなら、宗教は「希望のある特殊な形式」であり、「希望そのものと同じように、人の心に自然なものである」と語った思想家がいたからです。

わたしのゼミでは英米ならびにヨーロッパ世界の宗教（とくにユダヤ教とキリスト教）や哲学のテクストを通して、自分たちが当然だと思っている日常が異文化の人々からはどのように見えているのかを考察しています。すぐに消えてしまう表面的な現象にとどまらずに世界や意識の非合理的な次元にまで下りていくという意味ではより深く、一つの狭い文化に限定せず、複数の異なる文化を視野におさめるという意味ではより高い位置から、物事を考えたいと思っています。

真夜中に降り積もる雪のように、自分のなかに静かに蓄積した問いは、ときに学生の人生を大きく揺さぶります。ぜひこの大学という場で世界の見方が一変したという経験をしてほしいと願っています。

（佐藤貴史）

学生から（あいうえお順）

岩本　和也（3年）

このゼミでは宗教と哲学について勉強しています。ゼミの人数は先生を含めて5人と少ないほうですが、わきあいあいとした感じで楽しく勉強ができます。私はこのゼミを通して哲学を学ぶことにより、「自分」について深く考え直してみたいと思っています。様々な人の思想を学ぶことで、その考え方に賛成や共感をしたり、反対や違和感をもったりすると思います。私はそう感じる理由に「自分」や自分の思想というものが隠れていると思うので、そこを探っていきたいと思います。学問としての哲学は社会に出たらほとんどできないと思うので、この大学時代に挑戦します。

野尻　静（3 年）

私はヨーロッパの文化に興味があり、その文化の根底となっている宗教がどんな性質のものなのかを深く知りたいと思い、このゼミを選びました。ゼミではキリスト教的文化についての洋書、デカルトやニーチェの哲学書を読んできました。特に、私にとって今まで勉強したことのなかった哲学は難しく感じましたが、いくつもの新しい発見があり、自分の知識が増えることに喜びを覚えました。卒業研究では、宗教と神話に関連するテーマを扱う予定です。

松田　樹（3 年）

歴史に名を残してきた哲学者の主張を理解するのは大変ですが、様々な主張に触れてみて、「みんなちがって、みんないい」という印象を持ちました。自分の意見を持つことの大切さを実感し、また、このゼミに入ってから日常生活で当たり前だと思っていたことにも疑問を投げかけ考えるようになりました。ゼミが始まる前にその疑問を投げかけ意見交換し、始まれば哲学者の主張を読み取る、切り替えが素晴らしく、いい雰囲気で過ごせるゼミです。

横山　惇（3 年）

私は高校から世界史が大好きで、大学でも世界の歴史や文化を勉強したいと思い英米文化学科に入りました。他の学科と違い、社会に出てからすぐに使える知識を学べないのではないかと考えたこともありましたが、過去にあったことや自分たちとは全く違う価値観を持つ文化のことを学ぶことで、物事を多角的に見ることができるようになり、小さなものにも自分の見方次第では大きな世界が広がっているんだと感じることができるようになりました。佐藤ゼミでは、そんな哲学・宗教の世界について勉強しています。一人の哲学者の考えを勉強していると、自分とはまったく違う考えを持っていてイライラしてしまうこともありましたが、逆にその対抗心が自分の考えをはっきりと導き出してくれて、今では哲学者と " たたかう " ことが本当に楽しいです。5 人という少人数のゼミですがアットホームな雰囲気で、先生とも気軽に質問・議論できました。卒業研究は宗教と社会の関係、非一般的な宗教について研究したいと考えています。

2011 年度　北海学園大学市民公開講座

世界の言語と文化のモザイクを眺める

日本文化学科教授　**寺田　吉孝**

北海学園大学では、現在、5 種類の外国語科目（ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、韓国・朝鮮語）を開設し、学生達が各自の関心に従ってさまざまな外国語を学ぶとともに広く海外の事象について理解を深める機会を提供している。

今回、社会貢献の一端として、大学が有する知的財産を広く社会に公開し、市民の皆さんに提供することにより教育機関としての使命を果たさせていただくことになった。内容的に分かりやすく、それでいて、担当者各自の研究成果も十分に盛り込んだ講座を準備した。

ところで、「社会に開かれた大学」の施策を推進する文部科学省の指針を受け、本学でも今年度（2011 年度）より「履修証明プログラム」を実施することになった。2 部を対象に上記 5 種類の外国語のクラスに合計 45 名を受け入れ、「科目等履修生」の位置づけで、さまざまな年齢層の学生が 1 年間学んだ。この履修証明プログラム生も全員、今回の市民公開講座を受講した。

10月　1日(土)	開会式・挨拶	教務センター長　本城誠二
	ドイツ語・ドイツ文化	法学部　北原　博
10月　8日(土)	ロシア語・ロシア文化	人文学部　寺田吉孝
10月15日(土)	中国語・中国文化	法学部　中根研一
10月22日(土)	フランス語・フランス文化	法学部　中村寿司
10月29日(土)	韓国・朝鮮語、韓国・朝鮮文化	経済学部　辻　弘範

人文学部からは、寺田吉孝が「ロシア語・ロシア文化」に関して以下のような講演を行った。

受講者の大半にとって、「ロシア」という国も、「ロシア語」という言語も馴染みのないものであると推察し、講演の前半において、ロシアの地理、歴史、言語などに関して簡単に説明した。後半では、2011 年夏のロシア・ヴラヂーミル大学短期研修への学生引率の際に撮影した映像等を用いて、前半部分の復習をするとともに、ロシアの今の姿を示した。最後に、ロシアと同様、東スラヴに属するウクライナについて少し触れた。ロシアの伝統文化と思われているものの中には、コサックダンスやボルシチなどウクライナ起源のものが多いということ。ウクライナでは、ウクライナ語よりもロシア語の方が多く用いられているにもかかわらず、公用語はウクライナ語だけであるということ。ロシア語を公用語にするか否かをめぐって論争が続き、国の分裂の可能性さえもあるということ。ロシアを除くヨーロッパ諸国の中で、面積が最も広く、人口も 5 番目に多い大国であるということ。これらのことから、ウクライナは注目に値するということを示した。

卒業生通信

日本国内で英語を活かす

1部　英米文化学科　平成21年度卒業生（米坂ゼミ）
平田　ゆき
（株式会社しりべし保険クリエイティブリバティー勤務）

人口4,721人のニセコ町。農業とスキー場を中心とした観光産業が盛んな町です。外国人登録者数はここ10年で10倍以上に達し、平成21年度は約37,000人の外国人観光客が訪れています。また、2012年2月にはインターナショナルスクールのニセコ校が開校しました。私はこのような英語とは切っても切り離せない町にある、社員数7名の三井住友海上火災保険代理店で働いています。今年の春で入社3年目をむかえました。

仕事は主に営業を中心に書類作成、電話対応、事故対応等多岐にわたります。その中に外国人のお客様対応もあります。新規の外国人のお客様は私が担当し、保険の内容の説明、契約、事故対応等のサービスを提供しています。昔からの外国人のお客様は、その担当者との間で言葉の面で困ったことがあったときに通訳として手助けをしています。

大学3年の秋、「大手企業で英語を活かせる仕事がしたい。」という思いを持ち就職活動を始めました。結果は惨敗。4年の秋が終わっても内定が決まらない状況でした。どうしていいのかわからず、ついには自分の思いも捨て、「うちでは英語を活かすことができる仕事はありません。それでもいいですか？」と言われ、「はい。」と答えるも不採用通知。途方にくれていた卒業間近の4年初冬、そんな私を見かねた友人が「ほら。」とハローワークで探してきてくれた数枚の社員募集要項の中に今の会社がありました。

どの企業も聞いたことのない中小企業でした。片っ端から電話をかけたところ、今の会社だけ書類審査に進むことができました。履歴書の送付後数日経ってから「あなた英語勉強していたの？　一度面接に来ませんか？」と電話が来ました。二つ返事で面接に行ってみましたが、募集定員1名のところ、もうすでに1名決まっているとのことでした。半ば諦めていたところ、「採用します。」と思いがけない連絡が来ました。ニセコ町という土地柄、英語を話せる人が必要だったようです。大手企業ではないけれど、英語を活かすことができるこの会社で働くことを決めました。

実際社会に出て仕事で英語を使うというのは予想以上に大変です。母国語が違うから伝わらないことがあるのは当たり前という甘えは一切許されません。私の英語力の無さでトラブルが起き、お客様と上司に迷惑をかけたこともあります。自分の無力さに落ち込むことはたくさんあるけれども、夢であった英語を活かした仕事に就くことができ、日本の企業と外国人の橋渡しができている今を幸せに感じます。

仕事以外にも入社2年目からはマラソンを始めたり、地域のミニバレーボール大会に参加したり、趣味のスキーもずっと続けています。公私共に充実した生活を送っています。

体力づくりも仕事のうち？

ニセコの自然を満喫

大学院の窓

私の研究課題

「先住民族文化と観光」について
―アイヌ民族をめぐる最近のトピック―

文学研究科　英米文化専攻　修士課程１年　**藤川　清則**

私は昨春、人文学部を卒業し、大学院に進学しました。私の研究課題は、「先住民族文化と観光」ですが、特にアイヌ民族文化復興と観光の関わりについて、他の先住民族の事例も参考にしながら、研究を進めていきたいと考えています。

最近、アイヌ民族についての話題が、新聞等でも取り上げられ、ご覧になった方もいらっしゃるかも知れませんが、そのいくつかのトピックについて、簡単に紹介したいと思います。

まず、阿寒湖アイヌコタンに建設中だった、阿寒湖アイヌシアター「イコロ」が完成し、４月29日に正式オープンされ、ウェペケレ（アイヌの昔話）をテーマとした人形劇を上演し、阿寒湖のアイヌ文化観光の新たな目玉としていく予定となっています。阿寒湖アイヌコタンは、これまでも、オンネチセと呼ばれる劇場で古式舞踊の公演のほかに、ユーカラ劇、イオマンテ劇や野外劇場での「イオマンテの火祭り」などの創作劇を上演したり、まりも祭りにアイヌ民族の儀礼を結び付け、大自然への感謝の祭礼として定着させるなど、アイヌ文化の新たな表現を積極的に行ってきました。アイヌシアター「イコロ」での人形劇公演がアイヌ民族文化の新たな表象として成功するのか、見守っていきたいと思います。

次に、白老町の話題ですが、これまで、白老町では、アイヌ民族を主体とする財団法人アイヌ民族博物館が、文化伝承と観光活動を両立させながら、古式舞踊、伝統音楽の公演を行い、アイヌ文化の啓蒙、保存伝承、調査研究、出版等の活動を積極的に行ってきています。昨年６月には、内閣府のアイヌ政策推進会議が、「民族共生の象徴となる空間」作業部会報告書をまとめ、白老町がその候補地として選定されました。また、2012年度予算案に白老町への国立博物館設置のための調査費を計上することも内定しています。報告書では、その具体的機能として、主に次のことを挙げています。

（1）各地域の（アイヌ文化の）博物館等のネットワーク拠点となる文化施設を整備し展示、情報発信、調査研究と人材育成を行う。（2）アイヌ文化の実践・伝承等のほか、海外の先住民族文化との交流を行う。（3）アイヌ文化との調和を図りながら、レクリエーション活動等の場を提供するため、公園化を行う。（4）アイヌの精神文化を尊重する象徴施設として、伝統儀礼のための広場、モニュメントを整備すると共に、各大学等に保管されるアイヌ人骨のうち、遺族等への返還ができないものについて、尊厳ある慰霊が可能となる施設を設置する。集約した遺骨については、アイヌの人々の理解を得つつ、歴史解明のための研究に寄与させる。

しかし、アイヌの人骨や遺品、民具の問題については、過去に、研究の名の下に、不適切な収集が行われ、遺骨や遺品の盗掘、売買、民具の私物化等も行われました。このことから、遺骨の関係者を初めとして、アイヌ民族の中には、複雑な感情を持つ方々が少なくないと思われます。人類学（特に形質人類学）研究のあり方や、慰霊の場所や方法については、アイヌ民族の人々との充分なコンセンサスを得ることが必要であると考えます。

最後に、アイヌ民族の権利回復の問題ですが、1997年に「北海道旧土人保護法」が廃止され、「アイヌ文化振興法」が制定されました。しかし、この法律施行後も、国が行ってきたのは、アイヌ文化の保存･伝承活動に対する支援と生活支援に限定され、先住民族としての権利、土地や資源に関するアイヌ民族の享有権を回復するものとはなっていません。2007年の「先住民族の権利に関する国連決議」、2008年の「アイヌ民族を先住民族とすることを求める衆参両院決議」以降もその状況は変わっていません。そもそも、アイヌ民族が生活と文化の基盤としていた大地と資源は、条約や譲渡契約はおろか、交渉すらないまま、明治政府によって一方的に奪われたものであり、未だ、国によるアイヌ民族への謝罪と土地と資源の享有権を含む先住権の回復は行われていません。アイヌ民族全体の合意が形成され、先住権回復の要求が行われた際には、国はその要求に真摯に向き合う責任があると考えます。

■学会・研究発表

大石　和久

ミニシンポジウム･パネリスト「映画とおもちゃと博物館：アイヌと民族表象をめぐって」1月29日、北海学園大学人文学会第4回例会、北海学園大学 AV4 教室

柴田　　崇

「マクルーハンのメディア論サイボーグ論のプレテクスト」12月10日、北海学園大学人文学会第6回例会、北海学園大学 C30 番教室

須田　一弘

「人口流動・生業転換と環境の相互関係に関する生態人類学研究」（シンポジウム主催）11月、第65回日本人類学会研究大会、沖縄県立博物館

田中　洋也

Ueno, Y., Morikoshi, K., Oda, T., Sasaki, M, Tanaka, H. *Compiling a Corpus from Hokkaido Tourism Websites and its Utilization in English Writing Classes*. (September 2nd, 2011). JACET 50th Commemorative International Convention, Seinan Gakuin University, Fukuoka.

ワークショップ「電子ポートフォリオを活用したCALL授業による語彙学習支援」（講師）、11月26日、平成23年度大学英語教育学会北海道支部第2回研究会（北海学園大学）

常見　信代

「初期教会と司教区・教区の成立をめぐって」12月27日、中世ブリテン史研究会、奏文庫（熊本県益城町）

手塚　　薫

「Archaeological and historical overview concerning resource, subsistence and settlement in the Kuril Islands」11月、Kuril Biocomplexity Project Synthesis Workshop、米国シアトル（ワシントン大学）

安酸　敏眞

“Ernst Troeltsch and German Historicism.” 2011/10 Der 10. Internationale Ernst-Troeltsch-Kongreß, Ernst-Troeltsch Forschungskolloquium (10. Oktober 2011), München, Germany.

■著作・論文など

追塩　千尋

（著書）『中世南都仏教の展開』7月、吉川弘文館

「『続古事談』の寺社世界」12月、『新人文学』第8号、北海学園大学大学院文学研究科

大石　和久

「『インディアン』としてのアイヌ――日本映画とアイヌ表象――」、7月30日、『人文論集』第49号、北海学園大学人文学会、172-185、211-213頁。

小野寺靜子

「大伴家持への歌――笠女郎型の歌――」11月、『人文論集』第50号、北海学園大学人文学会、22頁

佐藤　貴史

「野蛮への転落？―― J･グットマンとL･シュトラウスにおける実存主義批判――」7月、『人文論集』第49号、北海学園大学人文学会、35-67頁

「カオスからの創造――ブーバー、ショーレム、ユダヤ青年運動――」12月、『新人文学』第8号、北海学園大学大学院文学研究科、8-46頁

柴田　　崇

「ファイボーグの理解―サイボーグに代わる者？―」12月、『新人文学』第8号、北海学園大学大学院文学研究科、36～97頁

須田　一弘

「パプアニューギニア山麓部のバナナ栽培（1）」

（共著）9 月、『岐阜大学地域科学部研究報告』第 29 号、岐阜大学地域科学部、53-98 頁

常見　信代

「修道院パルキアの再検討―アイオナを中心に」Journal of Haskins Society Japan, Supplement 1（2010）、61-81 頁

手塚　　薫

（著書）『アイヌの民族考古学』2 月、同成社

「伝統的知識の公開と『社会関係資本』としての活用」11 月、『国立歴史民俗博物館研究報告』第 168 集、国立歴史民俗博物館、33-62 頁

「北海道開拓記念館所蔵のランタンスライド」（共著）11 月、『国立歴史民俗博物館研究報告』第 168 集、国立歴史民俗博物館、265-284 頁

（編集）『北海学園大学学芸員課程学事報告書』3 月、第 23 号

寺田　吉孝

Преподавание иностранных языков в университе тах Японии、1 月、Новий Колегіум 2011 ①, Харківський національний університет радіоелектроніки

「ロシア語の基礎語彙について（2）」6 月、『学園論集』第 148 号、北海学園大学学術研究会

「ウクライナ語正書法史」9 月、『学園論集』第 149 号、北海学園大学学術研究会

中川かず子

「日本語の副詞 7―擬態語副詞（3）　人間の行為―歩く／見る／寝る・眠る」（『日本語ジャーナル』7 月号、韓国 DRAKWON 社／『階梯日本語雑誌』7 月号、台湾鴻儒堂書局：以下出版社同）

「日本語の副詞 8―擬態語副詞（4）　ものごとの状態・様子」『日本語ジャーナル』『階梯日本語雑誌』8 月号

「日本語の副詞 9―よいイメージと悪いイメージの副詞（1）」『日本語ジャーナル』『階梯日本語雑誌』9 月号

「日本語の副詞 10―よいイメージと悪いイメージの副詞（2）」『日本語ジャーナル』『階梯日本語雑誌』10 月号

「日本語の副詞 11―動詞、形容詞の副詞的用法」『日本語ジャーナル』『階梯日本語雑誌』11 月号

「日本語の副詞 12―副詞のまとめ」『日本語ジャーナル』『階梯日本語雑誌』12 月号

船岡　　誠

「沢庵と紫野の仏法」3 月、『人文論集』第 48 号、北海学園大学人文学会、1-22 頁

安酸　敏眞

（著書）*Frühes Christentum und Religionsgeschichtliche Schule.* Festschrift zum 65. Geburtstag von Gerd Lüdemann. Herausgegeben von Martina Janßen, F. Stanley Jones, und Jürgen Wehnert.（共）Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2011（“Ernst Troeltsch und die Konsequenz des historischen Denkens” を執筆。205-216 頁所収）

「ディルタイにおける解釈学と歴史主義」7 月、『人文論集』49 号、北海学園大学人文学会、1-33 頁

「シュライアーマッハーにおける一般解釈学の構想」12 月、『人文論集』50 号、北海学園大学人文学会、23-59 頁

■講演など

大石　和久

シンポジウム・パネリスト「北の映像ミュージアムを考える」、4 月 23 日、「北の映像ミュージアム」推進協議会、札幌市

「現代日本映画とコンテンツ」、10 月 9 日、北海学園大学・市民公開講座『コンテンツビジネスの変容』、北海学園大学 D30 番教室

■評論・エッセイなど

テレングト・アイトル

（書評）柳瀬善治著『三島由紀夫研究「知的概観的な時代」のザインとゾルレン』創言社、2010年9月、本体488頁、『三島由紀夫研究』11号、鼎書房、2011年9月、181-183頁

大石　和久

（書評）「亀井克朗著『〈死〉への／からの転回としての映画―アンドレイ・タルコフスキーの後期作品を中心に―』（致良出版社、2011年、台湾）」、11月29日、『日本映画学会会報』第29号（http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp/nl1111.html）

田中　　綾

（書評）谷川佳枝子著『野村望東尼』（花乱社）、『図書新聞』11月26日

（評論）「私性（わたくしせい）」、『短歌現代』7月号、短歌新聞社

（評論）「『感情労働』の時代と短歌」、『短歌往来』9月号、ながらみ書房

（評論）「インセンティヴとしての〈大人の発達障害〉」10月、『がいこつ亭』55号、同発行所

（評論）「しんどい人に、とどく歌」12月、『北冬』13号、北冬舎

（評論）「生権力と今　短歌展望2011」、『現代詩手帖』12月号、思潮社

（選評）「評論」10月、『さっぽろ市民文芸』28号、札幌市民芸術祭実行委員会

（選評）「第26回北海道新聞短歌賞」、『北海道新聞』11月11日

（選評）「今号短歌作品評」11月、『遊子』18号、遊子の会

（時評）「歌の周圏」『現代詩手帖』7月号◇8月号◇9月号◇10月号◇11月号、思潮社

（エッセイ）「うつむきながら／顔あげながら」＋短歌十首、『短歌研究』7月号、短歌研究社

（コラム）「書棚から歌を」『北海道新聞』　7月3日◇7月10日◇7月17日◇7月24日◇7月31日◇8月7日◇8月14日◇8月21日◇8月28日◇9月4日◇9月11日◇9月18日◇9月25日◇10月2日◇10月9日◇10月16日◇10月23日◇10月30日◇11月6日◇11月13日◇11月20日◇11月27日◇12月4日◇12月11日◇12月18日

手塚　　薫

「石斧で木を伐るがごとく―千島アイヌが適応した島嶼世界」9月、『月刊みんぱく』第35巻第9号、国立民族学博物館

■翻訳

寺田　吉孝

「M.M.ドブロトゥヴォルスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（8）」3月、『学園論集』第147号、北海学園大学学術研究会

「M.M.ドブロトゥヴォルスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（9）」6月、『学園論集』第148号、北海学園大学学術研究会

「M.M.ドブロトゥヴォルスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（10）」9月、『学園論集』第149号、北海学園大学学術研究会

「M.M.ドブロトゥヴォルスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（11）」12月、『学園論集』第150号、北海学園大学学術研究会

安酸　敏眞

日本ルター学会編訳『宗教改革者の群像』（共訳）11月、知泉書館（ホルスト・ヴァイゲルト「セバスティアン・フランク」〔371-387頁〕を翻訳）

■研究費

テレングト・アイトル

平成23年度北海学園学術研究助成・共同研究（代表：船岡誠）「新人文主義の位相――基盤的課題――（継続）」（研究分担者）

科学研究費補助金基盤研究（A）（研究代表者稲賀繁美）「『東洋』的価値観の許容臨界――『異質』な思想・芸術造形の国際的受容と拒絶（継

続）」（研究分担者）

追塩　千尋
平成 23 年度北海学園学術研究助成・共同研究（代表：船岡誠）「新人文主義の位相―基盤的課題―（継続）」（研究分担者）

佐藤　貴史
青山学院大学総合研究所 2011 年度研究プロジェクト（代表：西谷幸介）「キリスト教大学の学問体系論の研究」（研究分担者・青山学院大学総合研究所客員研究員）

須田　一弘
科学研究費補助金基盤研究（B）海外「半島マレーシアにおける自然・社会変化に対する狩猟採集民の適応戦略の多様性の解明」（研究分担者）
科学研究費補助金基盤研究（B）海外「パプアニューギニアにおける熱帯林の環境変化とギデラ地域住民の狩猟採集耕作生活」（研究分担者）
科学研究費補助金基盤研究（B）海外「バングラデシュにおける地下水砒素汚染と児童生徒の知的機能・社会生活能力」（研究分担者）

手塚　　薫
科学研究費補助金基盤研究（C）「千島列島における資源･土地利用の歴史生態学的研究」（研究代表者　手塚薫）
総合地球環境学研究所研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」（研究班員）
開発研究所総合研究『分権型社会における地域自立のための政策に関する総合研究』（研究参加者）
平成 23 年度北海学園大学学術研究助成・一般研究（研究代表者）

船岡　　誠
平成 23 年度北海学園大学学術研究助成・共同研究（研究代表者）

安酸　敏眞
科学研究費補助金基盤研究（C）（研究代表者安酸敏眞）「解釈学と歴史主義―― A・ベークとJ・G・ドロイゼンについての事例研究――」
科学研究費補助金基盤研究（B）（研究代表者高橋義文）「ラインホールド・ニーバーとその現代的意義に関する包括的研究」（研究分担者）
平成 23 年度北海学園大学学術助成・共同研究（代表：船岡誠）「新人文主義の位相―基礎的課題」（研究分担者）

■その他

テレングト・アイトル
4 月 10 日から 9 月 28 日まで本学の在外研修制度を利用し、英国ケンブリッジ大学クレア・ホールカレッジを拠点にして研究・資料調査・交流をした。

井上　真蔵
司会・コメンテーター、「第 20 回　北海道・カナダ姉妹都市会議」11 月 13 日、かでる 2.7

追塩　千尋
「中世西大寺流関係文献目録稿（続々）」7 月、『人文論集』49 号、北海学園大学人文学会

田中　　綾
第 13 回三浦綾子作文賞選考委員、12 月 9 日、三浦綾子記念文学館

手塚　　薫
国立民族学博物館『文化資源共同研究員』
北海道立北方民族博物館『研究協力員』

中川かず子
第 44 回全北海道学生競技ダンス選手権大会・大会会長、11 月、北海道大学第一体育館

編集後記

別れの季節がやってきました。ことしもお二人の先生が学部を離れられます。ご存命の方々と並べて申しわけありませんが、私事ながら昨年 11 月以来、私の 3 人の恩師と父が次々にこの世を去り、つい 2 週間前には私より年下の同僚が急逝しました。やりきれない気分です。

（大谷　通順）

第 36 号は、インフルエンザの蔓延による学級閉鎖と豪雪の便りを聞きながらの発行準備となりました。今号で編集委員の任期を満了される大谷先生、ご指導ありがとうございました。次号の発行、頑張ります。皆様、今後ともよろしくお願いいたします。（池内　静司）

人文フォーラム 36：2012 年 3 月 5 日発行　編集人：大谷　通順、池内　静司　発行人：安酸　敏眞
発行：北海学園大学人文学部（札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161）　印刷：㈱アイワード

表紙「男夷」図
彩色、26.7×38cm（間宮林蔵口述・村上貞助編輯筆録『東韃圖記』乾所収　北駕文庫所蔵）

間宮林蔵（安永9［1790］－天保15［1844］）は江戸後期の蝦夷地探検家、測量家として名高い。北蝦夷地（樺太）探索の幕命を受け、文化5（1808）年から翌年にかけて、東海岸は北知床岬まで、また西海岸は北上して間宮海峡を確認、更に北端近くまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵がこの探査に基づき、地名、地勢、産物、樺太アイヌやオロッコ、スメレンクルの風俗・習慣等について詳述したものに、林蔵の師村上島之丞の養子・松前奉行配下村上貞助（秦貞廉）が挿画を加え編輯したものである。

北駕文庫所蔵の乾坤二巻は貞助自筆本との推定もあり、『北夷分界餘話』と題して、文化8（1811）年に幕府へ献上された貞助自筆本（国立公文書館内閣文庫所蔵）に、文章・挿画共極めて近い貴重書である。本書と同名の写本の存在は知られていないが、安政2（1855）年刊の流布本『北蝦夷圖説』を始めとして多くの伝写本がある。

この図は『東韃圖記』乾巻の「南方初島人物」に収められている。当時、樺太（サハリン）の南部に居住していた先住民族の人々で、「大抵蝦夷島（北海道）に異なる事なしといへども其眉毛連續せざる者もありて髭また薄きに似たり。頭髪の剃去せる處多く其垂髪の状も亦蝦夷島に比しては長しとす。其他耳飾の如きは蝦夷島に異なる事なし」とある。衣服は、地産の木皮布と草皮から製する「デタラベ」という2種の布帛（ふはく）、及び交易で齎（もたら）される木綿衣、その他は魚獣皮を用いて満州服を模製し服したという。また、奥地に入るに従い「顔色要望自然に殊俗の夷風を移せり。故に冬月の頃犬皮の衣を服し水豹のケリ（履物）をつけ熊皮の巾を蒙りたる様は異俗の者とあやしむ事多しと云」「極寒の地なるが故に島夷長少となく總て魚獣皮を以て褌子脚袢皮履の類を製着す」とある。図は、猟の出で立ちか、鮭皮と布帛の衣服に獣皮の脚袢履物、毛皮の子供の素足と負けん気な顔がいかにも幼気（いたいけ）ない。

（北駕文庫　佐々木光子記）